



繪本更科草紙後編

卷之一

八十一番
五冊
光文堂

13
977
6



栗杖亭鬼卯著

山中鹿之助傳

繪本更科草紙後編

全部五冊

石田玉山畫

群玉堂梓



序

信之相木氏夫妻實為山中鹿介父若

母蓋有此父母而後有鹿介。世人唯傳

補鹿介武勇而莫知其所出之絕倫者。

及顯晦有幸不幸也。前歲遠人魁印客

遊浪華。寓居之。記其所贖事蹟詳且

盡矣。乃使画工玉山加圖像以表冊。題曰

特選 947 卷 6

大藏

明

字 日

更科草子。更科身婦名。顯以此者。殊稱
身艷。悉而勇力身。請余冠一言。余謂人
心固有四端。而不知充之。必如聖教何
哉。是故苟可敷四端以導善。則雖釋官
小說。亦足以助教邪。况斯編所記。壯士
烈婦。寔希世之仇麗。而志必忠。操必貞。子
載之下。令人心感動。砥礪焉。且以知鹿介

武勇有由出也。然言不文。豈不足述事辭
不巧。則不足達意。是作者之所竭力已。
若夫近世俗間所行。談士之雜記。怪力亂
神。聖人所不語。奇事異聞。伸寸刀尺。其潛
嚮。詭譎。虛飾。失實。則為斯編者之惑。不取
也。梓而行諸世。何不可之有。

文化幸亦孟夏

葛波山人



摠目録

第一

○相木森之助計後事隱信州話 ○中納言宗行の冥産之助更願の木采と語る話

第二

○鹿之助加賀国酒家お菊小逢話 ○鹿之助九重姫と見始并柵姫よみと傳話

第三

○鹿之助九重姫の危難と救ふ話 ○鹿之助宗教卿小頼と播州へ赴く話

第四

○鹿之助横道兵庫之助と助る話 ○鹿之助尼子小至る并怪異と静る話

第五

○大谷古猪之助姫と助老母義死の話 ○大谷古猪之助九重姫と奪ふ話

大尾



山中鹿之助幸盛像

吉原三傳六ノ一

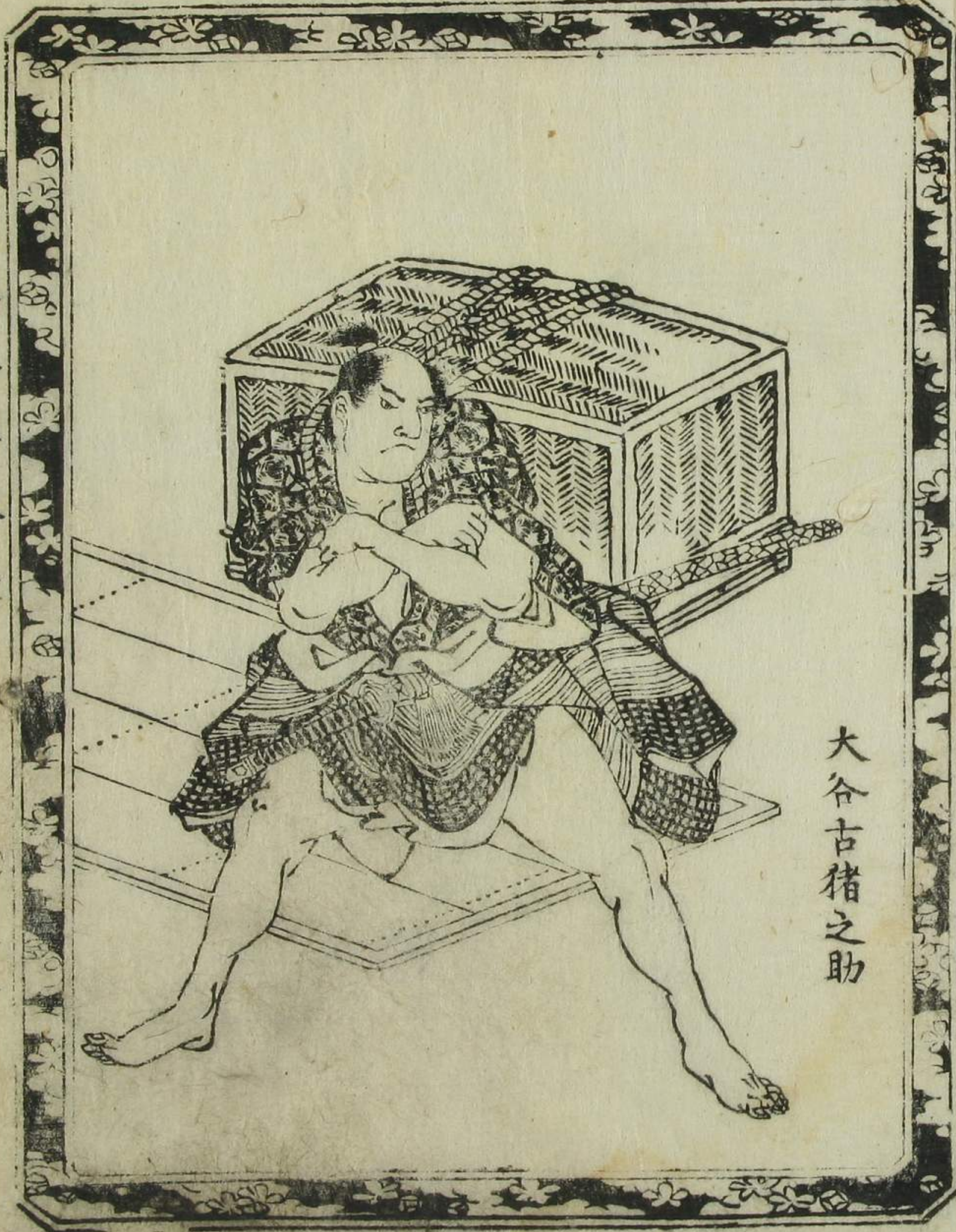
五八



侍女柵



九重姫



大谷古猪之助



横道兵庫之助

遊女浮舟

貞女全傳卷之十一

早川鮎之助



大江虎丸



妖快

婢女 葉末



勇婦全傳繪本更科草紙後篇卷之一

遠州日阪 栗杖亭鬼卯著

相木森之助計後事隱信州話

六韜曰同天下之利者得天下擅天下之利者失天下と云わ
 ろふ甲州の武田晴信朝臣入道して大僧正信玄と号し
 近國の威を震ひ既ふ天下をも吞ん勢ひなかりふ不幸
 おして世を早うしむる嫡子四郎勝頼を代通る人
 益勇威をゆるがざり大野の名四方お薫りたりて天
 慢心生り長阪入道長幹跡部大炊の兩人と又を
 ねむい奸姦お惑わさる忠臣は馬場真田高阪原等乃
 諫言をきり長篠の出陣一決して多むる馬場美濃守

信之今も武田の運も是すてややかり人多く遠州諏訪が城
ふりり多に相本森之助方へ腹心の家来と以て言ふなり
けりは是下久しく泰代アテテ諏訪が城を守りてやが
東海道静溢なり然るも主君勝頼忠臣の凍と用ひむらじ
此度長篠出陣の度既よ一決せり是武田の運命の傾く
所なり予も此度と限りと存ぞれば是下の事心も係り
中送るなり抑武田家お恩顧の人もつらば村上氏没落
の後ハ予が伺ふ志も信義を專守りて事あるは
多き寂早某討死せし後ハ遠くは武田滅亡せん是下早く
諏訪が城と退去し何国やも世に安く生涯を送りて又
ふりり人跡も一一遍の田向も預りてと言送りては誠之助

涙としくくと涙し呼鳴忠臣成我義士成我武田の真意と
計と討死と覚悟おは何ぞ我等が事まで及ぶべき此人と
世と同道りてやいも返も嬉しけれ予久しく山林に世と遊ん
と思ひしうご馬場氏の恩お折足されうらく世所より信之
の厚き志おめで今より隠逸の身とかなべしと文おめぐと認て甲
州へ送り更科鹿之助と近く招き美濃守の文と見せし我
氣と稱しりて某ハ十六年以前お眞鬼とる身なりしが美濃
守の情およりかく安樂まらし鹿之助も人並の人もなれり
かりふと誠し信之のたまひのなり此度長篠へ掛向ひ此人と
生死を俱おせんは安きも勝頼長篠跡部と深く用ひ
凍臣と忌嫌ふハ愚将やう殊お此西人ハ我お仇らる者ともなれり



山中鹿之助

更科



相木森之助
更科鹿之助
兩人ふわりれ
飯訪が城を
立退信州へ
趣く

相木森之助

真如全傳卷之二

美濃守ク詞のどく是より故郷へ立歸り陶朱公が跡を追
 こんと思ふより汝等、くろり高見うの、更科鹿之助の
 所とのづべしとわてしが更科はらうり落る涙とゆへ誠小君乃
 宣ふどく美濃守殿小再生の恩われも勝頼長政跡部六
 恨こそらき何の命とり報じん利なり心のみ信州人
 身退きあへつゝ女の身たるま何国をも供じん鹿之助
 と今年十六才るれば汝が心とも述し父は随ひて信州へ退
 去らんや又天下よ遊行そ英名と顯せと志するや心底誠
 白池小父はへすべしとわてしが鹿之助ハ最前より一言のいら
 も言としてさうのふありるがゆとやうの息を継て父
 の前ふり寄我父宣ふどく信之の志の世を以り殺す

だに某つゝ考す小今天下大乱き英雄星のくち起り
 一昇平の代とるうなんも斗アがじいやくも我幼年より井上道人
 よまてふ軍学の奥義と学び剣術の琢磨せしも天下小英名
 と顯はらん為あり父小あまが信州へ退き老農とふけて生涯
 と短人事口惜きや小あまが父小随はるハ不孝うれども
 尊と天下よ横行して世と納め民のくちみを救はん事を願
 外なり我一人此城小苗り寄来らん敵小淡吹世其後何國
 へも立退名將とまゝんで隨身せんより外の願ひハはれと弁
 舌水の流るくく左も勇ましく述る鹿之助なくくく
 點頭さ汝がや所大おより我も其心とりて道人と師となし
 せたりたりまの長篠の軍いさご其沙汰と聞ど甲州ふる

名わたり廿四将のうち數多附添ぬまば上方勢の必勝も定
 がし其實説と糾して免も角もせんこり多し鹿之助完尔
 とおわりし此軍千一ツも甲州の勝とりするやうに將の
 愚るや假令忠臣の即等いふはどりもいんもをばり
 かくらん此覽は日やうとて甲州の敗走音信やう人と
 終らざる長篠の敗軍美濃守の討死のよ東海道に注
 進櫛の齒を引くもまば鹿之助も鹿之助が先見と感して
 うふ其ハ旅の用意して更科と後とも立退べし今日より汝が
 心のまに計らふべし是獅子の兒と様との例なりとわり多し
 更科志がうく沈吟してやうが父ハ近頃佛の道ハ深く入らせ
 むい人とめらう生らるめのと害とらるやとさういふふまきと

鹿之助初陣のり獨此城に置んこといふゆしても案ト信る君
 を心ちりう立退るやう鹿之助が初陣の武者振とも見
 今生の思出ハ一働し跡より追付まうきんハゆるむい
 んやと眞實満面わらう見え多しバホ之助ららわら
 鹿之助が武者ふり見度ハ断なぐり女のカ業ハそつぬる
 たりと頭とわらうハ免も角もせしきよ我を心ちりうに
 立退ん鹿之助よ命らるハ再會とべし更科も跡より来ら
 きよと益ふとと打冠と見歸アとせ立出ハ勇士の心
 をゆるうと

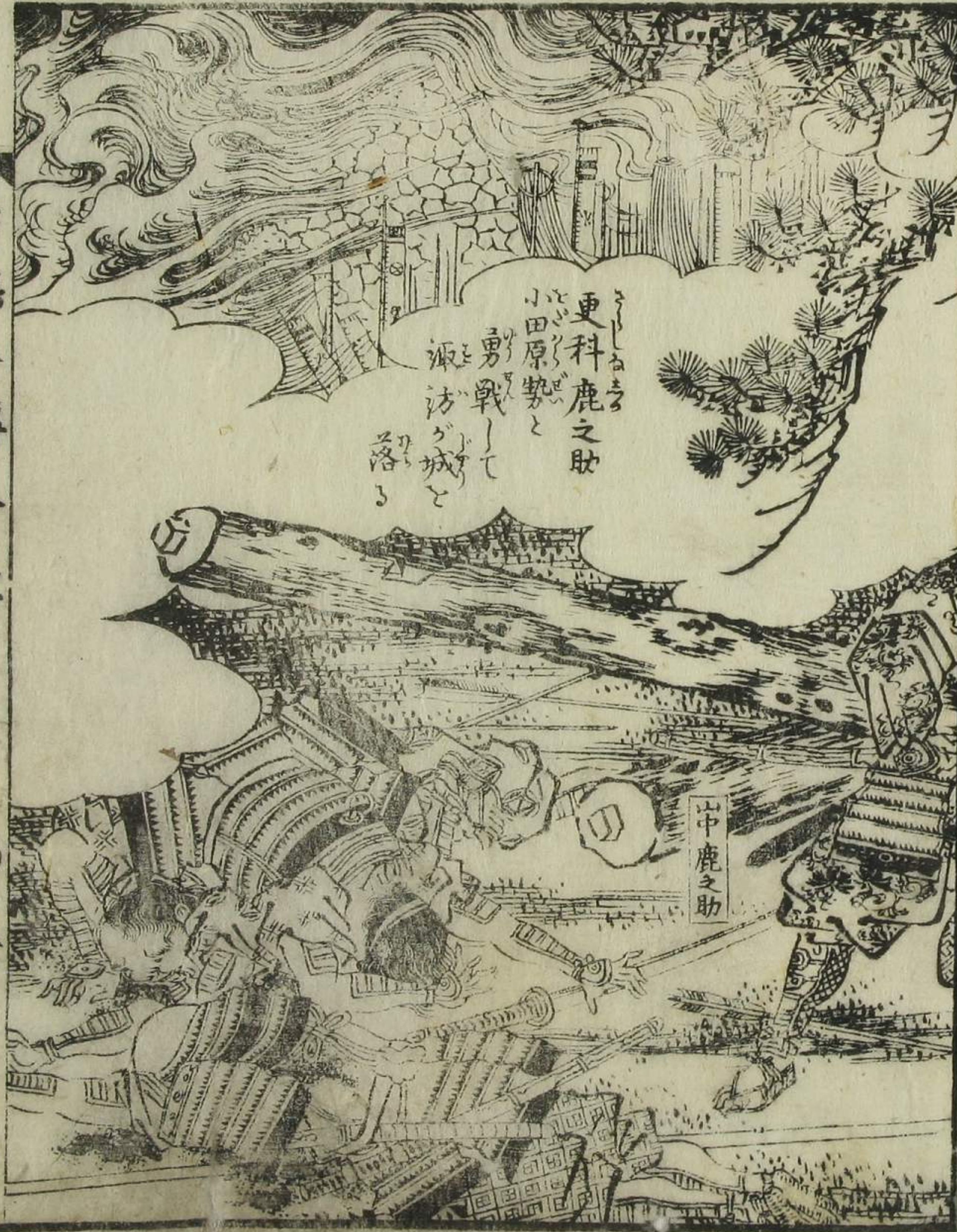
山中鹿之助更科勇方中納言宗行の靈
 鹿之助更科ハ未来と語る話

甲州武田勝頼朝臣馬場真田が諫と用ひど長條出陣に
 其軍利はうごいて馬場美濃守真田源太左衛門等乃
 忠臣あつて討死して多ればからうして甲府へ逃歸らまはる
 此事小田原北條氏政のうご聞えまはる馬場信之遠州諏
 訪が城を守らるがゆゑに東海道の道に沿うてはしる皇都乃
 往來心小まをせざして今美濃守討死して空城とまらる
 甲州より交代の勇士きこえらる先小踏つづいて往來をまらる
 せしめて笠原新六を大将として八千余人相州を打立夜を日
 小継より責のぎりけり此事諏訪が城へ聞へればかめて翻し
 たるものもまは家來の者ども不殘甲府へへ更科鹿之助只
 二人空城小籠で悠こりて居たりまらるを勇まらる既

小田原勢諏訪が城と十重廿重小より巻鯨波三度揚々れども
 内おも音もせと無人城のおとくまは扱ハ甲州へ逃行て空城
 かく人いざや一番乗して高名せりと我先小追手の門押破り
 無二無三小込入ける此時更科が出立より白綾の下着小排儒
 子小金糸りて浪小鷗の模様縫う上着と着白綾の鉢巻
 引志免白柄の長刀うい込先おもはる山中鹿之助生年十六才
 色白く眼中もろく位あひま猛うら其日の出立小排威
 の鎧ふわごと甲と着ま是も大前髪うら乱し白綾乃鉢
 巻もうら引し大身の鎧引をが追手の内ふむけり寄
 手おもは見えて小兎といひ女性の只二人まらるては続く人もあ
 らば若謀りやちうんとうら寄付は笠原新六是と見て

大不怒で憎き小児の戯き假令謀りて何程のりうあつべ
 き生捕り高名せよと采配打ふり下知とればいや男の若
 武者何うハりつてたれらふべき我討とんとかけよきバ更科長カ
 と水車のまゝ廻り矢場ハ二三人切倒しこれハ此勢ハ恐れ
 て追手の門外へ人なれとつて逃出さる鹿之助ハ大身の鎧
 をまゝくるとりまゝに逃行敵騎馬歩行のわづらなく十三
 騎突落しけきバ笠原も逃るといなく二三町引退しがきりと
 眼を定え敵ハ只二人ぞ久せくと下知とらふぞ漸足と踏直
 切先と後へ切てうふまを鹿之助更科是と見ると面倒
 りりと追手の門外ハ大さなる槇の木二本をとりて人手引
 拔是とりて群る敵と打倒しこれハ何うハりつてたれらふ金
 一討ハ五人十人ぞとありくとるに倒しとる人間業とハ見えざり

多敷世隙ハ心きくは軍兵一人門内へまきき入二の丸ハ火
 とかけききバ更科も鹿之助も今も是ちうすかりと一筋の
 血路ハ開き何國ともく落行多れば小田原勢凱奇三度
 揚りゆりく小田原へ引取多れば此雄名と稱しとる源治ガ
 城と今も槇原とをりける扱夫より更科鹿之助をとり
 ほど戦い今ハ思ひ残さるもなりと上方のうく落行る
 山道ハ踏すもいゆけどもく人里へハ出ど鹿之助思ふやう
 源治ガ城と下アきバ直ハ菊川の里うふ凡三四里も歩行
 すとサリ小人里のりうざると思義うれ我も甲冑と脱
 旅の用意をなす一先母上と父の両手ふりて夫より諸國



遍歴せんいざせむへと言々まば更科も心付わくも無向
 山の觀世音へ月参り常小行通い道もふか
 深林へさうい来りるやうに寂早黄昏見え遠
 寺の鐘此の聞ゆきばいづれのか乃音ふまふい行るバ
 人里のなきくまひまどさうく来りて手を取らハ一又
 一里ぐらも行と思へ通小火のうげ見えよりさばこそ人
 家らさうれと親子心きしく其所へたどりつけいふも
 弄羅小位なせー養らと菰垣いとゆづれ枝折門やじ
 く内小普門品を読誦と読声の聞ゆきばいと嬉しく鹿之助
 立より某等ハ上方へまうは者ふか道小まふ此所へ
 ころりゆはは是内情小一夜と明さきいむへと言入るに

内より童子一人立出り是ハ世はまのぶ人の内入の所を中
 く内省ハ叶ふす死ふいとけりや更科言々を世は
 思ひまふ方とられバ猶更わつたてても世とまのぶ者もに
 りバひり一夜を頼りまふととり声のとれてや主の
 声しりりいりいりやのなりきこる人入る芳と休らふを
 りふ重子も扉をゆき内ふ入るまば二人も大小は終るに
 内ふ入る様子を見ふ只人の住家も見えは床と和琴
 樂器の類と飾り主も堂上方と見え鉄櫃とるくと
 けり紫の差貫を召き机ふかやまふいとけり更
 科鹿之助と近くゆられゆきこころの落人を見受り此所ハ
 人倫絶る所さう追人さうの来る所ふらゆらゆら芳と

休めど大なるぶりふのいかにきど是と食して飢をよめられ
 多くと桃のいかに菓とらへるふこは有がごとと割り喰ふよ
 其味い美しき半バ食し腹満より主人ふ菓の名
 と尋ふふ笑つて答へど鹿之助謹而今宵の礼謝して
 且いふやうに訣わりも雪の上人のかたけ鄙うを隠住すぞ
 承々親子ハ世ふゆきなりの身されば人ふ洩さぶきりのふ
 あらび色まはれ名を明させも人ハ力ももろりのいと眞實
 と頭し宣ふれハ主人涙ととととと涙し能もさハ宣ふ
 何とつはくまん承ハ姓ト承又三年三月十五日南陽縣乃
 菊水の一句とのこし此所ハ命と落せし中御門中納
 言宗行なりハ身が父相木森之助此山上ハ十余年居城

せしふより我古墳馬蹄おかけしきハ年々里人の祭祠と受
 ろり是父のふもものかり此度武田家の運尽て此城
 落城せんといふむらり歎ふハ思へども詮ふしせえんぞ
 此身達の危難を救りんと此所へ招きつりハの童子あそ
 汝ハ有縁の者あり十六年以前笛吹峠あそ更科難
 小逢しし時汝を救ひし様なり今我ハ仕へし此所中
 かり明日更科と此者ハ送らせし森之助が手へ渡へし
 汝ハ母ハ引別き是より京都へ登るべし幸ゆきゆのゆき
 らど今予が家五代の孫中御門宗教ふらなむ身と
 立よ是承奉之助への寸志なり夜も更ぬまば休む座し
 我も寐せんと奥へ入らせあふよ親子ハ大小敬と物言んと

まはし唾のどく將きさうりに眠きごとて前後をさるる伏
 おろり扱朝ら〜身ふき〜更科鹿之助や〜眠り
 覚とす眼をさゆけぶふといふら〜草菴もら〜
 あり〜松の下ふ石がた上墳のどく見え〜所ふ枕とら
 ぶ〜伏たりら〜浅中〜や爰はとも何國なるんとら〜
 見廻せ〜風訪が城の林菊川の里あり更科信心膽ふ
 めい〜ら〜りの流〜嗽と古墳をねづと有が〜やめ〜
 告を〜ら〜ふ上の豕子の身の上心ふか〜は是より
 わ〜ら〜夫ふ随ひ信州へ趣く〜鹿之助よ〜ら〜
 宗行卿の告ふ〜せ天下ふ名と揚よ錦の袂を賢〜て
 古卿へ歸る〜る音信を〜ら〜びある心安や父は〜ら〜告

を〜ら〜や悦あ〜べ〜一時も早く上方へ登る〜と詞
 涼〜く述〜る鹿之助ハ今更母の別き〜ら〜打派〜
 てあ〜ら〜宗行卿の告ふ〜ら〜我ハ上方へ登る〜ら〜
 母上只一人信州へ〜越〜ら〜ん事心え〜ら〜一先由供〜ら〜
 り〜折〜何國とも〜ら〜大きな〜様一足来〜ら〜更科が
 袂と引〜ら〜山奥の〜ら〜行〜ら〜更科声を励〜ら〜未練〜
 鹿之助天下の英雄と〜ら〜んと思ふ身のか〜ら〜婦女の
 性根〜ら〜浅間〜ら〜親子と〜ら〜か子とハ思ハト
 此様も〜ら〜十六年以前汝と救ひ〜ら〜老様〜ら〜是ハ随ひ
 角〜ら〜何の障〜ら〜の〜ら〜急げや〜ら〜と言捨〜ら〜木の根岩
 角〜ら〜い〜猿渚とも〜ら〜白雲とゆ〜ら〜ぬも〜ら〜

夕此時更科が仙骨頭をうり後の篇と見ゆべし
鹿之助大谷古猪之助を助る活

扱も鹿之助ハ忙然と母のゆと成見送てうらぐ再び宗行
卿の古墳小打向ひ猶も母の行先を願ひかめて用意せし
黄金せりく菊川の里ゆり旅の調度を取きりめ笠深く
と打冠で上方うて登りてうらぐ穩りうらぐる世は海道と
行んより山越えふ登りんと樹川の里より秋葉の山道へ
とけ入る此日も早暮ふんととらふ宿くるべき家もあらば
猶山深く入るふ一村あり心うきく立よふ此里乃人民
との外騒ぐく松明よ繩こて声くはりよ何事やと立寄
らまばあづら家の一軒あり前ハ十四五才むうりの小童と

樹とかさひうらめ付つけ今焼殺やきころを用意よういとまは所あり傍ふ
老婆一人伏倒ふたふたとて涙泣なみとるゆりさぬけり鹿之助不審に
おの村長と思しき者よ其故を尋まば其人答てうらく
此者を猪之助とて此老婆が子なり常ふ山よ入て柴と蒔て
業わざももふ近頃ハ二天廻りの上木もと根ねうたうて表門へ
積置つみおき是と割と價ねとる是とま主ゆる木とていと猥わづる盗
らうら大膽とや言はん殊更年ととも行ゆざる身み小くう大木と
根ねうたふなとゆり人間業にんげんわざと見えは此盗心次第このどろ小増長
セハ熊くま段長だんぢやう範とやうんがど死し者ものふうとて楠くすのぎも若葉わかしほ以
摘つみくくざまハ石いしとなりて動うごくが旅たび人も若人わかしほられ必かなく
盗心ぬすこころと持もてふと早火はやび打取出うちだし火ひをむけん勢いきほひなり此時このとき



大谷古猪之助



庄官

山中鹿之助

大谷古猪之助
 山中鹿之助
 猪之助の難
 ととと

真如全傳卷之一

老婆声をわけの旅人我子と救せむむへ我子全く
 盗むなどとも執者ふあはば此母と頼はんさあぬく
 苦勞をとれども此所ハ山中にて薪の價おしなうてハ
 ちの由へ出来心めり村長及の山の樹と盗しちま祭
 何しに悪き心めりさ助あへゆりさ之と狂氣の如
 く見えなれば鹿之助も不便ふせりい庄官お打向むく
 足下の怒りもさ事なご徳の樹お人間一人焼
 殺も無道やゆさきかく村中の人の中あさう恥し
 あふ上ハ我お挨拶しを問ゆりつらハさ此者と殺し
 うら老母も飢死せんまらさ一人あはば二人の命もれが
 さぬく事とさゆり淀多きども庄官頭と左右お打り

こハ旅人の仰るまら此根引ふりさる木とも今十年も過
 ら帆柱ともちり大金おちるべし今も永樂錢百銅
 ふりちるらん木なれば詞を立此者より木の價と出
 ら命ごかりハゆりいべしと分別らりく述る鹿之助
 大悦志うら其盗り木數ハ程らる左官答て
 七本あり鹿之助懐中より小き黄金と一ツ取出し此
 金七百文の價不足る是と取りゆりむり人ヤ庄官
 満面小笑と含み黄金を納め百姓に向ひし此由曹
 司隱徳家より木の價とむり上ハゆりつらさ魚
 かさくいと思りさつらむ村中の者ども庄官の無道と
 思へども詮方さ焼殺さんと語りゆりさささく大悦び

鹿之助と稱し已かざるぐみ立帰るる鹿之助立より
 若者のいさしめ涙を流すれば老婆ハ只夢の心地にて躍
 上りて鹿之助と伏拜し泣き此若者寂前よりまると
 とどろ然と居りて鹿之助が前ハ両手と突
 寂前母が如く貧苦小せまりりぬ業をとり既生
 ぢりて火あがりの刑小行ハまるとせし君の事情も助
 事此の恩の世よふ報トまると今宵ハ見苦しく
 とも此茅屋の雨露と凄げせると懇おつり母を猶
 更ハ不自由小しと泣く人いれども此所おおりて旅の
 勞も晴しおへと無理小手はとりて引入るあを鹿之助も
 よろこび居炉裏の椀折る金何とぶる饗食在ふたりは

せんと老母ハ飯と結び青菜の衣をかける出りて鹿之
 助ら笑ひ春うらなれども賞の色せし餅をれが賞餅と賞
 既せんと言々るあへ今も三倉の里小賞餅と名物とぞ
 たりて鹿之助がみて足下いせし知年の身とて大木を
 引接あつり凡人の及ぶ所おあつて定て故める人なり人
 そゆ人おせりの金はと命と救ひしなり色まれば名乗る
 といふも老母涙を押ぬが故ゆる人なりと尋ね昔乃
 ちのうらなれりて世者の親を信州木曾左馬之助後
 小仕へ大谷半左門とせし者なり此子三歳の年木曾
 没落ゆきて此所お引籠りて鉄炮を能せしは持人と
 かり渡世送るなり四年以前夫ハ身まがりをまると此

猪之助 熊と業とをいひしりいしが元来力強人の三四人春
 肩柴と一人あちり里へ持出鬻りしに去年此母が大病故
 十五才のうら大困窮し夫也へ人をあはれと木と引拔持
 歸り新とるし以後里人に見附らる今日の日合滅お君の
 此情の生と世に親子の者忘まひて伏拜めば助も
 涙おひせし昔を鐘の一筋も持せし身の盗賊の悪名を受
 けも前世の戒業つらなる故うらん此上ハ母をに見送は
 君の草履と摺んどかりも召仕し下さる今日主後
 の内盃頂戴仕し幸母ふゆえんとまの少しの酒を調
 置しうとくけ陶ふ茶碗と差出せば母もよろこびい
 此方とハ存せねば此粧いの凡人あちりおハさねと悴も悟ア
 見えはる河と彼が望のいく主後の内盃下さるしと言け
 見ハ鹿之助打しし名もなれ者うるかアハ尊敬せし
 ものうらび併大成志ゆき時と得ば名も頭と金
 其れを親子の望おまを主後とちりびとも俱く吹草を
 夫とてハ随分母ハ孝行專要なり饗左の酒無下おなり人も
 本意なりは盃とらる親子の夫ハ終といはれ西塔の
 武藏坊ハ五條の橋あちり牛若の内曹司ハ主従となり身は
 終るも忠義を忘まひ我も此盃頂戴より忠義を尽
 と三度頂き母へさるきハ母も悦び衆も悴と練く不忠
 致しはるなりと契約し夜もいより更之ハ休みいと捐
 打く金三人とも伏しり十日鹿之助夜部よりの禮謝し立

猪之助 熊と業とをいひしりいしが元来力強人の三四人春
 肩柴と一人あちり里へ持出鬻りしに去年此母が大病故
 十五才のうら大困窮し夫也へ人をあはれと木と引拔持
 歸り新とるし以後里人に見附らる今日の日合滅お君の
 此情の生と世に親子の者忘まひて伏拜めば助も
 涙おひせし昔を鐘の一筋も持せし身の盗賊の悪名を受
 けも前世の戒業つらなる故うらん此上ハ母をに見送は
 君の草履と摺んどかりも召仕し下さる今日主後
 の内盃頂戴仕し幸母ふゆえんとまの少しの酒を調
 置しうとくけ陶ふ茶碗と差出せば母もよろこびい
 此方とハ存せねば此粧いの凡人あちりおハさねと悴も悟ア
 見えはる河と彼が望のいく主後の内盃下さるしと言け
 見ハ鹿之助打しし名もなれ者うるかアハ尊敬せし
 ものうらび併大成志ゆき時と得ば名も頭と金
 其れを親子の望おまを主後とちりびとも俱く吹草を
 夫とてハ随分母ハ孝行專要なり饗左の酒無下おなり人も
 本意なりは盃とらる親子の夫ハ終といはれ西塔の
 武藏坊ハ五條の橋あちり牛若の内曹司ハ主従となり身は
 終るも忠義を忘まひ我も此盃頂戴より忠義を尽
 と三度頂き母へさるきハ母も悦び衆も悴と練く不忠
 致しはるなりと契約し夜もいより更之ハ休みいと捐
 打く金三人とも伏しり十日鹿之助夜部よりの禮謝し立



古猪之助 羊之
猪と打殺し
鹿之助
カ量
見
と居

山中鹿之物



大谷古猪之助

真如全作卷之一

出んとさうは猪之助押さへ頃日此山奥小年狂猪住人ど田
 畑とらじしは更狩人鉄炮と打しとも皮厚くして玉通らば手に
 余でい獣めうい今日奉公始お君の供中山奥へ分入此猪と仕
 留覽お入まし今日此逗留下さるしと願ひるれは鹿之助も
 行先うて急がぬ旅さき面白にふふサハ竹籠より用意し
 て草鞋もれノ兩人ハ山奥へ分入る此時秋のけづめを桔梗
 女市花いと美しう咲乱き薄の折くも奥なりと猶奥ふく今
 行くお向ふの岩根お牛のどけ猪伏より猪之助急度見てらま
 さい件猪あうい我仁田四郎より狂猪も組らるる覽お入
 さん万一手おらるる君とこの春さそと大手と廣げ立むと
 鹿之助ハ竹籠を杖お突いと奥ある事ごと岩お根お腰打掛て

詠り居る猪ハ是と見よりも大おたけを牙とりて猪之助と
 人と一さんお馳来らば船とともうい首おしんづと組付組れ
 かつぐ猪と岩根お根様いなく何國ともうけを打る
 鹿之助ハ猪之助お誤らしてハ老母一言決ふしと跡とまひ
 て谷峯の難所と厭ひうけ行ハ最早猪之助ハ猪ハ組
 と免山刀を抜る切らんしと願ふ此猪惣身お松脂とぬて
 日お乾し數百年と経る事うれハ鉄石のどく刀通るる
 けらけらけらうけ拳とりて猪の頭をつけさるる打多きハ此強力
 おうりて頭碎けて死しうりて鹿之助是と見より大お驚
 誠小汝ハ凡人おけらば十五才の小腕とりて年経る猪と手を以て
 打殺さるる往昔の忠常ハ物の數うハ今より汝が名と改大谷

古猪之助と名乗る〜と扇をもちてちづと立まは猪之助
とよめといひ絶む少〜ばりの獣と組苗〜とて我名と下〜
事生前の面目此上か〜母も無や悦んんとかの猪打〜
我家へ帰や〜母も立出大およろこび今一兩日も逗留〜
む〜と鹿之助ハ都の〜急げハ我姓名と認め
割符の〜と渡〜豕世ふ出かハ此割符と澄摺ふ〜
未〜母へ黄金と与へ上方〜急ぎけれ

此所十五歳の重の命と七百文小買受〜古跡
今此村と十五七百村と〜

繪本更科草紙後篇卷之一終

